
黒猫と装飾銃の始まり

イイ日旅立ち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒猫と装飾銃の始まり

【Nコード】

N9113P

【作者名】

イイ日旅立ち

【あらすじ】

クロノスを抜け出したトレインだが、その時彼は一人では無く・

正月頭が暴走した結果変な妄想が浮かんできたので投稿します。色々問題ありきな内容かもしれませんがお暇な時にでもどうぞ

（前書き）

・・・何でしょう、ふと頭に思いついた妄想を文章におこしたら、
いつ短編を書いてしまった。正月頭って怖いですね！

『初めまして、私は装飾銃^{ハーデイス}です。今は相棒^{マスター}のトレインの銃として頑張ってます!』

「うん? お前何言ってた藪から棒に」

『いえマスター。最初の挨拶は物事の基本ですよ!』

「ふん、そうなのか」

『そうなんですっ!』

お初にお目にかかります。私は無機物ですが、どんな因果かこうしてマスターの愛銃としてバンバンターゲットを抹殺しています

嘘です。そんな物騒な事する訳ないじゃないですか。私は清く正しい無機物ですよ？ 人殺しとかw

そんな訳で「どんな訳だよ」黙らっしやいマスター！・・・ゴホン、今私達はクロノスから逃亡している最中で、追手を殺さないようマスターの人外の銃技で追っ払ってます。流石は私のマスター！。

元々は感情の起伏の少ないマスターでしたが、とあるお方との出会いによって感情を取り戻してくれたお蔭で、私もこうして話せるようになったのです。奇跡ってあるんですねゝ（他人事）

そしてしばらくは穏やかな時間が過ぎ、私も人を殺す事無く精々手足を撃ち抜く程度で済ませていたのですがここで不幸な出来事が。

あんのクサレナルシー……ゲフンゲフン！
いけない、私としたことが罵倒がつい……では気を取り直して。

一度だけマスターのパートナー（私は絶対認めませんがね！）だったクリードが突如、マスターの恩人であり親友だったあのお方を、サヤ様を斬殺。そしてマスターは色々考えた末、クロノスからの脱退を決意したのです。

「……にしてもさー」

『はい？ 何ですか？』

「いや俺って多分処分済みとして処理されるんだろうけどさ、どうしてこつも追手が来るのかねえーとふとな」

『・・・・・・』

その問いに関して、私は一応答える事が出来るのだが絶対に口にはしない。

『（よりもよってあのアマア…！ まさかマスターに懸想していやがるとは……ッ！ そして？？の権力を行使してマスターを捕縛、その後なんかテキトーでつち上げてマスターを慰めるふりをしてそのまま……ぐわああああああ！ 美人なんて滅びてしまえっ！（！）』

私をマスターと引き合わせてくれた恩人でもあるお方、セフィア様がマスターの事を好きなのは確定的に明らかだ。

ナンバーズの中で群を抜いてイケメンであるマスターに想いを寄せるのは として当然の反応だけれども、あの女だけは許せない。

あつ、サヤ様は別です。あのお方は素晴らしい方です！
私のメンテの時も凄く優しくしてくれました！ 別に磨く時のオイルが最高級品だったから贖っている訳じゃありませんよ？

ですがあのアマ、もといセフィリア様だけはいただけない。

そもそも年齢不詳なのにあの美貌は一体何のチートだ？ スタイル抜群、頭脳明晰、武器であるクライストを使う剣術はまさに芸術。あの生けるバグにもし本気でアプローチされてでもしてみたら、マスターの貞操はあつという間に花と散るらむ……綺麗に纏めてる場合じゃなくて。

『良いですかマスター！ セフィリア様の外見と口調に騙されては

いけませんからね！　あの笑顔の裏で何ドス黒い事を考えてるのかわかりやしん」

「へえー、私ってあなたにそんな風に思われていたんですね？　ハ―デイス」

『ギクウ！？　馬鹿なツ！？』

「た、隊長！？　なんで隊長自らここに来てるんスカ！？」

・・・そう、それはある任務の後、私がマスターに如何にあの女が危険であるかを言おうとした時だった。

ナンバーズの中でも飛び抜けた察知能力を持つマスターの知覚をも掻い潜り私を掴むその手には、その白魚のような気品さ線の細さからは想像もつかないほど圧倒的な握力が込められていた。

「私って、そんなに腹黒くて裏では何考えてるのか分からないような、そんな胡散臭い女に見えますかハートネット…？」

『おのれ貴様！ 少しでもマスターに近づいて…ってああ、あああああ！？ そんなに近づくな触るなしだれかかるなあああああ！』

「落ちつけて相棒！ そして隊長も離れて下さい！？」

「そんな…！ 私って魅力ありませんか…？」

「い、いや、その、今はそんな事を話してる訳じゃ…」

『このメギツネ！ 私に実体があったら間違いなくその幸せ真っ黒思考の脳みそに風穴を開けてやるのにい！』

「おいハーデイス！ そりゃ言い過ぎ…」

「あら？ その、幸せ真っ黒思考というのはこう言う事をする思考の事を言うのかしら？」（トレインの上着を肌蹴させる）

『クツ！ 貴様アアア…！ 私が手を出せないのをいい気に何と言うつらッゲフンゲフンツッ！…けしからん事を！』

・・・嫌な、思い出ですね…

今まではベルゼー様というストッパーがいて下さっていたお蔭であの女の暴走にも歯止めが効いていましたけど、こうして逃亡している以上こちらを弁護してくれる存在などなく、捕まったら最後。

私は鉄くずに戻されてマスターはあの女の玩具に……それだけは死んでも避けなければならぬ。いや別に私に『死』という概念は無いんだけど！

こうして、私（オリハルコン製の銃）とマスター（もう最高。これ以外に何と形容しろと？）の逃避行が幕を開けるのだった。

この先に例え泥棒猫がいようと変身美少女が出てこようと果ては変態がまた顔を出してきたとしても！

『マスターの敵は私が潰す！』

「正確には俺がだけどな」

『折角の氣勢をそがないで下さいよぉ…』

「悪かったって。でも、これから宜しく頼むぜ？ 相棒」

私は銃。マスターの前に立ちふさがるモノあらば、全霊をもって撃ち抜いてみせる！

そして！　そしていつかはマスターの気持ちも……！

『・・・ハイっ！　勿論です、マスター！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9113p/>

黒猫と装飾銃の始まり

2011年1月9日05時26分発行